

かわいそうな粉ひきの若いものと小猫

ヤーコップ、ウィルヘルム・グリム Jacob u. Wilhelm Grimm

金田鬼一訳

青空文庫

ある水車すいしゃごや（一）に、粉こなひきのおじいさんが住んでいました。おじいさんのところは、おかみさんもいず、子どももなく、若いものが三人奉ほうこう公こうしているだけでした。この三人がここになん年ねんかいてからのこと、ある日、おじいさんが若いものに、

「わたしも、としをとつてな、ストーブのうしろへすわりたくなつたよ。おまえがた、旅にでなさい。それでな、そのみやげにいちばんいい馬をもつてきたものに、この粉こなひき所じよをあげる。そのかわり、この小屋こやをもうたものは、わたしを、死ぬまでやしのうてくれるのだぞ」といいました。

ところが、この若い者のうちで三番めのは下したつばのおいまわしで、あとの二人ふたりからは、わからずや扱あつかいにされていて、これに粉こなひきごやをせしめられるのは、ふたりとも感心しません。もつとも、この男のほうでも、べつに小屋こやをほしいとおもっていないのです。

とにかく、三人そろつて旅に出たものですが、村をではずれると、兄弟あにでし子しふたりは、わからずやのハンスに、

「おまえは、ここにいるほうがよかる。おまえなんぞ、一いっしやう生しょうかかたつて、駄馬だば一つ手にはいりやしないよ」と言いました。そう言われても、ハンスはくつついて行きました。

夜よるになつて、三人は洞穴ほらあなにたどりついたので、そのなかへはいつて、ごろ寝ねをしました。

ちえのある二人は、ハンスがしようたいたくねこむのを待つて、自分たちだけ上へあがると、ハンスをおいてきぼりにして、どこかへ行つてしまいました。これで、二人はうまくしてやつたと思つたのですが、だめ、だめ、そううまくいくわけのものではありません。お日さまがのぼつて、目をさましてみると、ハンスはどこかの深い洞あなの中にころがつていました。ハンスは、そこいらじゆうきよろきよろ見まわして、

「こりやあ、よわつた！ どこにいるなあ」

と、大きな声をしました。それから起きあがると、手足をちよこまか動かしながら洞穴をはいあがつて、森へはいつて考えました、「おれときたら、こんなところでほんとうの独りひとぼつち、だれにも相手にされやしない、どうしたら馬が手にはいるのやら」

こう考えこんでとぼとぼ歩いているところへであつたのは、小さな三毛猫みけねこです。三毛猫は、いかにもわけへだてなく、

「ハンスさん、どこへ行くのよう」と、声をかけました。

「なあんだ！ 話したつて、おまえさんにやどうもできやしないや」

「おじさんのおのぞみがどんなことだらう、ちゃんとわかつてますよ」と、小猫が言い

ました、「おじさんは、いい馬が一頭とゆうほしいのね。あたしについてらっしゃい、そうして、あたしのめしつかいになって、七年だけ、かげ日なたなく働きなさい、そうしたら、馬を一頭あげることよ、おじさんが、生まれてから一度も見なかったことのないような、りっぱなのをね」

「はあてな、きみのような猫だぞ」と、ハンスが考えました、「だが、ひとつためしてみるかな、こいつの言うことがほんとうだかどうかね」

相談がまとまって、猫はハンスを魔法のかかっている自分の小さな御殿へつれて行きました。ここにいるのは猫ばかりで、それがみんな三毛猫のごけらいなのです。猫どもは階段を身がるに跳びあがったり跳びおりたり、それはそれは陽気で、いきげんでした。日が暮れて、みんなが食卓につくと、三びきだけは音楽をやらされました。一びきはチェロを弾き、一びきはバイオリンをひき、三びきめのは、ラッパを口にあてがって、いっしょうけんめいに頬ほつぺたをふくらませました。

ごはんがおしまいになると、食卓がかたづけられました。

三毛猫は、

「さあ、おいで！ ハンス、あたしのおどり相手におなりよ」と言うのです。

「いやだ!」と、ハンスが返事をしました。「にやあにやあのおじようちゃんとおどるのあ、ごめんだ、そんななこと、まんだやったことがねえだでのう」

「そんなら、この人をおとこへつれといで!」

と、三毛みけが小猫どもにいいつけました。そうすると、一匹いっぴきが燈火あかりをもつてハンスを寢間ねまへつれて行く、一匹いっぴきが靴くつしたをぬがせる、一匹いっぴきが靴くつした下したをぬがせる、そしていちばんおしまいまいに、一匹いっぴきが燈火あかりを吹きけしました。

あくる朝になると、また、小猫どもがやってきて、ハンスがおとこから出るのを手つだいました。一匹いっぴきは、ハンスにくつしたをはかせる、一匹いっぴきは、くつ下くつしたどめを結むすんでやる。一匹いっぴきは、靴くつしたをもつてくる、一匹いっぴきが顔を洗あらってやれば、一匹いっぴきは、濡ぬれている顔を、じぶんの尻尾しっぽでふいてやりました。

「こりやあ、ほんとに肌はだざわりがええぞ」と、ハンスが言ったものです。

こんなにしてもらいましたが、自分はまた三毛猫みけねこにつかえて、毎日薪まきを小割こわりにしなければなりませんでした。この仕事をするのに、ハンスは銀の斧おのこぎりをうけとりました。銀のくさびくさびと銀のくさびのこぎりをうけとりました。それから、槌つちは銅あかねでした。ハンスはこうやって薪をこなしたり、家の中うちの中にいればおいしい物を食べたり、おいしい物を飲のみんだりしているの

ですが、顔をあわせるものは、三毛猫と三毛のめしつかいばかりです。

あるとき、三毛はハンスに、

「外へでて、あたしの牧場まきばを刈かつてね、刈りとつた草をほしておくれ」と言つて、銀のも
 のでは、（立つていて使う）大きな草刈鎌くさかりがまを、黄金きんのものでは砥石といしを一つわたして、こ
 れはのこらずちゃんと返しておくのだよといいつけました。ハンスは外へ出て、いいつけ
 られたとおりのことをしました。仕事をしてしまうと、ハンスは鎌かまと砥石といしと乾ほし草くさをうち
 へもちかえつて、まだお礼をもらうわけにいかないかと、きいてみました。

「だめ！」と、三毛がいました、「そのまえに、もう一つやつてもらうことがあるの。

あすこに、銀の材木があります、それから手斧ちようなでも、さしがねでも、いりようのものは
 なんでもみんな銀でそろつてるから、あれで、まず小さな家を一軒けんたてとくれ」

そこで、ハンスは小さい家を一けん建ててしまつてから、することはもうみんなしてし
 まつたのに、馬だけはまだもらわずにいるが、と言いました。このときはちょうど七年た
 つていたのですが、それが半はん年としぐらいにしか思われませんでした。

あたしの馬が見たいの？ と、猫がたずねました。

「見てえだよ」と、ハンスが言いました。すると、三毛は小さな家をあげました。戸をあ

けると、馬が十二頭とうずらりとならんでいます、いやもう、おどろいたのなんの、あたまを高くあげてるようすのそのりつぱなこと、毛づやはまるで鏡のように、ぴかぴかしているその美しさに、ハンスの心の臓ぞうは、かげながら、にこにこがおです。

三毛猫はハンスに飲み食いをさせてから、

「うちへおかえり！ 馬は、つけてあげない。三日みっかたつたら、あたしが、自分でおまえのとこへとどけてあげるよ」と言いました。

こんなわけで、ハンスは旅だちました。三毛は、粉ひきごやへかえるみちを教えてやりましたが、新しい着物をこしらえてやらす、はじめから着ていた古いぼろぼろの上うわつぱり一枚でおしたので、これも、七年たつうちに、あつちもこつちもつんつるてんになっていました。

ハンスがうちへかえったときには、あと二人の若いものも戻っていました。二人とも、馬をつれて来たには来たのですが、一人のめくらは盲で、もう一人のびっこは跛でした。ふたりは、

「ハンス、おまえの馬はどこにいる？」とたずねました。

「三日たつと、あとからやってくるだ」

これをきくと、二人ともわらいだしました。

「どうだい、ハンスは、ハンスだなあ、おまえ、馬をどこからつれてくるつもりだい？ さぞりっぱなやつだろうて」

ハンスはお部屋へやへはいました。すると、粉ひきの親方が、おまえは食卓についてはいけない、きものがぼろぼろだからな、だれか他人ひとが来でもしたら、とんだ恥はじをかかなくちやならないと言いました。それで、ハンスの食べる物は、ちつとばかり外へだしてやりました。それから、晩になつて寝にいきましたら、あとの二人はなんといてもハンスに寝どこをやらないので、ハンスは、しかたなしに、とうとう鷺がちょう鳥のこやへもぐりこんで、ほんのすこしばかりある堅いわらの上にくらまりました。

朝になつて目がさめたら、もう三日という日がたつていて、六頭とくだちの馬車ばしやがやつてきました。まあ、その馬のかがやく毛づや、これこそほんとうに見物するねうちがある、見ごと、みごとというわけです。それに、ごけらいが一人、別に七頭めの馬をひいていました。これは、このかわいそうな粉ひきの若いものもらう馬なのです。馬車からは、きらびやかな王女がおりたつて、粉ひきごやへはいました。この王女というのは、例の小さい三毛猫で、ハンスは、かわいそうに、この猫に七年のあいだつかわれていたのです。

王女は粉ひきに、粉ひきの下ばたらきだという若い者はどこにいますか、とたずねまし

た。おやかたは、

「あれは、このこやへ入れるわけにいきましねえ、なにぶんおんぼろでござんしてな。がちようごやにねそべつておりやす」と言いました。すると、王女は、たつた今すぐにその者をつれてきてもらいたい、と言いました。それで、みんなしてハンスをつれだしてきましたが、当人とうにんは、よんどころなくちんちくりんな上うわつぱりの前をかきあわせて、はだか身をかきました。それと見て、かかりのごけらいは、ながもちのとめがねをはずして、りつばなきものをとりだし、無理むりむたいに若いものに行ぎようずい水をつかわせて、それを着せました。で、こうしてしたくがすっかりできあがってみると、その美しいこと、どこの王さまもかなうまいと思われるほどでした。

それから、王女は、ほかの粉ひきの若いものをつれてきた馬を見せてもらいたいと言いました。そこへでてきたのは、一頭は盲で、一頭はびっこでした。王女は、ごけらいにいつけて、七頭めの馬をつれてこさせました。粉ひきはこれを見て、こんなすばらしいのは、これまでにここへきたことがない、と言いました。

「おまけにこれが、三番めの若いしゆうにあげる馬なのだよ」と、王女が言いました。

「では、あれがこのこやの持ちぬしになるのでござんす」と、粉ひきが言いました。王女

は、約束の馬はここにいる、水車ごやも、そのままおじさんのものにしておくがよい、と言いつて、じぶんは、かげ日向ひなたなく働いてくれたハンスを馬車に乗せ、相乗あいのりで行ってしまいました。

ふたりは、いちばんききに、ハンスが銀の道具をつかって建てた小さな家のほうへ馬車をはしらせました。行つてみると、その家は大きな御殿で、なかにある物は、なにもかも銀と黄金きんばかりです。ここで、王女はハンスと御婚礼をしました。ハンスはお金もちでした。生しょうがい涯がいこまることのないくらいのお金もちでした。それですからね、わからずやは碌ろくなものになれつこないなんて、決して、そんなことをいうものではありませんよ。

(1) この粉ひきごやでは、水車でなくて風車を使っているのかも知れませんが、原文にその区別をあらわす言葉や表現が見られないので、わかりやすく、水車小屋としておきます。

青空文庫情報

底本：「完訳 グリム童話集（三）〔全五冊〕」岩波文庫、岩波書店

1979（昭和54）年9月17日改版第1刷発行

1989（平成元）年5月16日第13刷発行

※「若いもの」と「若い者」、「いいました」と「言いました」、「で」と「出」、「洞穴」と「洞あな」、「弾き」と「ひき」、「靴下」と「くつした」と「くつ下」、「見」と「みごと」、「鷺鳥」と「がちょう」、「跛」と「びっこ」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「110 かわいいそうな粉ひきの若いものと小猫（KHM 106）」となっています。

入力：かな とよみ

校正：noriko saito

2019年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かわいそうな粉ひきの若いものと小猫

ヤーコップ、ウィルヘルム・グリム Jacob u. Wilhelm Grimm

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 金田鬼一訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>